

九十年代批評におけるゴーリキイ

松 本 忠 司

ロシア文学における九十年代は、「世紀末」という言葉の含蓄にふさわしく、古い世代と新しい世代、リアリズムと反リアリズム、伝統と革新の激的な葛藤が特徴的であった。

先行する八十年代、人民主義運動の決定的破綻と反動攻勢の全面的強化という一般的社会状勢を反映して、ロシア文学は「たそがれの時代」の薄闇の中に低迷しなければならなかった。帝制下におけるロシア人民の苦悩にみちた生活を深く真実に描き出し、その解放の道を帝制廃止に指向したゴーゴリ——シチェドリーンの批判的リアリズムの文学伝統は、グレープ・ウスペンスキイや、この年代に登場したチェーホフ、コロレンコらによって継承され、その手法の極限まで深化させられていったが、社会閉塞の圧力のもとに失意・幻滅に消沈する多数の作家・詩人がこの伝統に背馳し、批判的リアリズム文学の流れは衰弱して新しい文学潮流の出現を条件づけた。

九十年代に入ると、この傾向は顕在化し、リアリズムは現実・生活の諸相に対する批判力を失い、「事実」を無選択に描くという平板な自然主義に墮していった。これと並んで、この時代にはもう一つの文学傾向が現われはじめた。それは解放運動への幻滅、それへの変節を思想的土壌として、人民派的理念を含めて一切の社会的理想に不信と懷疑をもって対し、現実世界からの逃避を指向する傾向であり、ニーチェ、ショーペンハウアーらの個人主義的、厭世主義的哲学やイプセンからボードレールまでの多彩な西欧近代派文学の影響を強く受けつつ、反リアリズムを一般的性格とするロシア独自の近代主義文学の諸潮流が形づくられたのである。

1892年、メレシコフスキイは、その詩集に『象徴』の表題を冠して、新

しい文学の道をシンボリズムへと指向したが、その翌年には論文『現代ロシア文学の衰頹の原因および新しい諸潮流について』を発表し、六十年代以来のロシア文学における先進的伝統——革命的民主主義の精神と批判的リアリズムを基調とする伝統を、功利的・卑俗的・傾向的な非芸術的文学と貶し、その社会性の中にこそ文学衰頹の原因が存在すると断じ、新しい文芸復興の方向を反社会性、反リアリズムの神秘的象徴主義の道に求めるべきであるという宣言を行なった。

しかし、八十年代の「沈滞期」がロシア社会の表面をおおう静けさの内奥から、やがて解放運動の決定的段階へとつき進む力づよい奔流を準備していたように、この奔流の根原的活力によって胚胎されつつ、「翼を失った」リアリズムをロマンチカの靈感によって魅えらせながら、さらに一つの新しい文学潮流が九十年代に登場する、——これがマクシム・ゴーリキイをその最大の代表者とする文学傾向である。

ゴーリキイが処女作『マカール・チュードラ』によってその文学活動を開始したのは、いみじくも、メレシコフスキイの詩集『象徴』発表と同じ1892年であった。この二つの作品の出現は、本質において、世紀末から大革命期に至るロシア文学における「新しい芸術」創造を追求する二つの、峻烈に対立・抗争する基本潮流の発達の方角を予告するものであったが、1892年の時点においては、メレシコフスキイが若冠二十六歳ながらすでに詩壇の明星たる地位を得ていたのに対し（第一詩集は1888年発表）、ゴーリキイは二十四歳にしてようやく作品発表の機会を得たにせよ、それが僻遠の一地方紙の文芸欄であって、読書界によってはまったく顧みられることのない、無名の、独学の労働青年であったのである。その後においても、前者は詩・散文・評論の各分野において多才を発揮し、ロシア近代主義文学の総帥としてつねに文壇の焦点となる華やかな活動を展開していったのに対し、後者はなおしばらくは中央の批評界にも読書界にも知られることなく、ヴォルガ地方紙での地道な創作経験の積み重ねを続けなければならなかった。そして

1897 年、『コノヴァーロフ』、『マーリヴァ』、『オルロフ夫妻』その他、ゴーリキイの作品が相次いで首都の大雑誌に掲載された後でさえ、彼の作品集の出版を引き受ける出版社はそう容易には現われなかった。B. A. ポッセによれば、出版社主 O. H. ポポーヴァは、自尊心をもっている出版社が地方の雑文書きの仕事を出版するわけにはいかぬ、と語ったという。しかし、専門家ではないアマチュアの、ドロヴァトーフスキイとチャルーンニコフの出版所が新人の二巻作品集刊行という営業的冒険をあえて行なったとき、作家も出版者もまったく予期し得なかったほどの大成功がもたらされた。ゴーリキイはたちまち、全ロシア的名声を獲得し、さらに二、三年のうちに全世界的に著名となった。C. Д. バルハートゥイの調査によれば、ゴーリキイの作品に関する批評的反響は 1897 年には 10 点、1899 年——45 点、1900 年——166 点、1901 年——約 300。二十世紀初頭の西欧では、それまでまったく知られなかったゴーリキイがすでにトルストイ、ドストエーフスキイと同列に論じられるようになった。

しかし、二十世紀に入ってから、なおしばらくは、ゴーリキイの文学は必ずしも正しい評価を与えられなかった。読書界における異常な反響には、無責任なジャーナリズムによって粉飾された、「伝説的な」作家の生活経歴に対する卑俗な興味によって喚起された部分も少なくなかったし、批評界もまた、作家を浮浪人の精神的指導者とみなしたり、当時の流行思潮の伝道者——ニーチェ流の「力の讃美者」、あるいはデカダンス的「ネオ・ロマンチズム」の使徒と見る傾向が強かった。九十年代の末からゴーリキイと深い友情を結んだチェーホフは、1903 年のユージン宛書簡に、——「私の思うには、ゴーリキイの作品が忘れられる時もあるだろう、しかし、彼自身は千年たっても忘れられることはあるまい」と書いたが、この言葉は人間ゴーリキイのその人間的魅力を最も端的に表現するものであるが、同時に、ゴーリキイを良く知るチェーホフにとってさえ、この頃までのゴーリキイの文学が、いかに理解に困難であったかを語る言葉でもある。

本稿の課題は、ルナチャールスキイ、ヴォローフスキイらマルクス主義文芸学者によるゴーリキイ批評活動に先立つ時代、いまだ評価の定まらなかった九十年代におけるゴーリキイ批評を掘り起こし、批評におけるゴーリキイ像の変遷を跡づけようとするものである。文献のすべてに触れることは出来なかったが、各年度ごとに、発表されたゴーリキイの作品に対する批評的発言の中から特徴的と思われるものを拾い上げてゆく。

本稿の中で取り上げた雑誌・新聞の原名、訳語、発行年、発行地（ペテルブルク—П. モスクワ—М と略記）を以下に掲げておく。

Биржевые ведомости — 《株式報知》，日刊紙，1861 年創刊，中断を含み 1917 年まで。П。

Книжки «Недели» — 《週間》付録文庫，月刊誌，1878-1901，П。

Жизнь — 《生活》，月刊誌（1899 年 2 月まで旬刊），1897-1901，П。

Курьер — 《急使》，日刊紙，1897-1904，П。

Мир божий — 《神の世界》，月刊誌，1892-1905，П。

Московские ведомости — 《モスクワ通報》，日刊紙，1756-1917，М。

Новое время — 《新時代》，日刊紙，1868-1917，П。

Новое слово — 《新しい言葉》，月刊誌，1894-1897，П。

Новости — 《ノーヴォスチ》，日刊紙，1880-1906，П。

Новь — 《処女地》，隔週刊誌，1884-1898，П。

Образование — 《教化》，月刊誌，1892-1909，П。

Одесские новости — 《オデッサ新報》，日刊紙，1884-1917，オデッサ。

Россия — 《ロシヤ》，日刊紙，189-1902，П。

Русская Мысль — 《ロシヤ思想》，月刊誌，1880-1918，М。

Русские ведомости — 《ロシヤ通報》，日刊紙，1863-1819，М。

Русский вестник — 《ロシヤ報知者》，月刊誌，1856-1906。

Русское богатство — 《ロシヤの富》，月刊誌，1879-1918，П。

Русское слово — 《ロシヤの言葉》，日刊紙，1897-1917，М。

Санкт-Петербургские ведомости — 《Санкт=ペテルブルク通報》，日刊紙，1728-1917，П。

Север — 《北方》，週刊誌，1888-1914，П。

Северный вестник — 《北方報知者》，月刊誌，1885-1898，П。

Северный курьер — 《北方急使》，日刊紙，？-1900，П。

Сын отечества — «祖国の子», 日刊紙, 1862-1905, II.

1893 年

10 月 ヴォルガ地方新聞《ヴォルガーリ》（26 日付）に短編『マカール・チュードラ』がカフカース地方新聞《カフカース》より転載された。短編には次のような紹介文が付記された、——「この短編小説の作者はまだ書き始めたばかりの作家である。しかし、この短編によって、および本年の夏、《ロシヤ通報》に掲載された短編『エメリヤン・ピリヤーイ』によって察するに、独特な詩文学的天稟を有している。」これはゴーリキイの創作に関する公刊物における最初の反応であった。（以下の記述においては、地方紙についての調査は目下のところ極めて不十分なので、主として首都およびモスクワにおける公刊物に対象を限定し、作家・批評家たちの書簡・回想記などによって補足することにする。）

1895 年

6 月 短編『チェルカッシ』が《ロシヤの富》7 月号に掲載された。これにより、ゴーリキイは初めて、首都の大雑誌に作品発表の機会を得た。（この号の雑誌の扉には、ゴーリキイの推薦者で、前年から編集部に加わっていたウラジーミル・コロレンコの名が雑誌の発行人として、大文字で初めて印刷された。）

《ロシヤ思想》（№8）の書評「定期出版」が『チェルカッシ』を取り上げ、作品の内容をつたえるとともに、「芸術のまっすぐな道」を歩みつつある新人作家の、「正真正銘の」芸術的才能に注目し、「正確な描写は、チェルカッシが、本物の、つくり物ではない百姓、金銭亡者である、みじめな経営農民との比較において進歩的現象であるということを諸君に認めさせるものである」と述べた。しかし、短編の導入部に「若干の社会的ペシミズム」の徴候が見られるとして作者の前途に対する危惧の念を表明した。

《祖国の子》(7月4日)では、M. K. [クプレツキイ]が短編を「興味がなくはないエピソード」と評し、《株式報知》(7月20日)では、M. ポルタフスキイが短編の中に「若干の、純粋な才能の萌芽」, 「叙述の絵画性, 詩的とさえ呼び得るもの」があり, さらに「内面的真実」に付随して「生活的真実」が存在すると指摘した。

『チェルカッシ』に対して ロシヤ批評界が全面的分析を捧げるのは後年になってからであるが、B. A. ポッセは翌年9月、この作品に高い評価を与えた(25~26 ページ参照)。

9月 短編『あやまち』が《ロシヤ思想》9月号に掲載された。短編は、初めコロレンコを通じて《ロシヤの富》編集部に送られたのであるが、編集長 H. K. ミハイロフスキイの反対に遭い、ながく放置された後で不採用と決定されたのであった。⁽¹⁾

《ノーヴォスチ》(10月5日)で A. スカビーチェスキイは、この短編について「デカダンの小説」と規定し、「題材や登場人物の状況ばかりでなく、用語そのものにおいても チェーホフの『六号室』の粗野な奴隸的模倣である」と酷評した。また、《祖国の子》(10月6日)では M. K-ский [クプレツキイ]が同じように「イデーの鮮明ならざる失敗作」とよんだ。これに対し、M. ポルタフスキイは、《株式報知》(11月23日)で、『あやまち』を「思想において深く、完成度において成功せるゴーリキイ氏の絶妙なる短編」として読者に紹介した。

当時のロシヤ出版界においては、例年、年頭の雑誌・新聞の紙面を過去一年間の文学活動に対する総括的批評論文によって飾ることを通例としていたが、1896年1月1日付けの《ロシヤ通報》は「1895年の文学」という論文をかかげ、この一年間において《ロシヤの富》に掲載された文学作品、特にコ

(1) 拙稿「ゴーリキイに関する覚書——コロレンコとの交友をめぐる——その2」, 小樽商大人文研究第24輯29ページ。

ロレンコ『言葉なくして』、ガーリン=ミハイロフスキイ、ゴーリキイ『チェルカッシ』、ヴェレサーエフ『道なくして』、マーミン=シビリャーク『穀物』その他などが「現代生活の諸現象に対する文学本来の関心」を示したことを認めた。これと正反対の見解を示したのは《オデッサ新報》で、ここではこの一年間は「極端な反動時代」、すなわち出版弾圧が相次いだ八十年代よりも更に不作の年であり、芸術が過去の伝統（ナロードニキ主義）から後退し下り坂を辿っているとの主張がなされ、この傾向を代表するものとして、新人作家たち——ヴェレサーエフ、ゴーリキイの前記作品やセラフィモヴィチの炭坑生活を扱った一連の記録小説が挙げられた。

1896年

7月 短編『トスカ（ある製粉所主の生活の一頁）』が《新しい言葉》（№№9～10, 6～7月）に掲載された。

《オデッサ新報》（7月22日）は、ゴーリキイの新作を、もしも「メロドラマ的效果がなかったなら、申し分のない」『チェルカッシ』に数段見劣りする、と評価しながら、特に憂慮すべき欠点として、描き出される対象の「極端な例外性」、「過剰で極端な写実主義への、最も汚らしい生活現象の描写への傾向性」を指摘した。《祖国の子》（8月7日）、《ロシヤ通報》（8月8日）《ノーヴォスチ》（8月29日）もともに、基本的には批判的な反響を示した。とりわけきびしい批判を『トスカ』に浴びせたのは、《週間》付録文庫（№11）に発表された H. エンゲリガルトの論文「似而非人民主義」であった。評者は、短編の中に似而非人民主義的傾向の「典型」を見てとり、ゴーリキイがこの作品の中で、あたかも「他人の不幸を喜んでいる」かのごとき態度をもって、「酒場のデカダンス」を「結核の、無気力な街学者——教師」に対置させている、ときめつけた。

『トスカ』およびゴーリキイの他の作品を高く評価したのは B. A. ポッセである。彼は《教化》（№9）に書いた、——「ゴーリキイ氏の小さい短編小

説、とくに『チェルカッシ』と『トスカ』は……わが国の最良の作家たち、ツルゲーネフ、トルストイその他の作品のごときものである、——記憶のうちに深く刻みこまれるのだ……」ゴーリキイは傾向性によって生活に強制するのではなく、彼のスタイルが「鮮やかな大胆さ」によって生活をきわ立たすのである。「農村の^{クラーク}富農の外見のもとに、心を埋めつくす日常的がらくたを投げ棄てようとこころみる、感じ易い、愁いがちな魂の存在を指摘したのである。」

《ロシヤ思想》(1897, №1) の П. Ф. ニコラーエフは、一年間の文学現象を総括しながら、「生活自体においても、文学においても古い型式をうち破る」ところの、「社会生活の活動舞台にデモクラシーの進出」を歓迎し、「いまだわれわれにとっては未知の、深い、新しい過程」について証明するものは、マルクスの「大量の、ロシヤにおける弟子たちの登場」であると述べ、その教義については「信じがたい」けれども、「益なしにあらず」という考えを表明した。《神の世界》(1897, №1) では、A. Б. [ボグダーノヴィチ] が、社会的関心の昂揚に関連して歴史、経済、自然科学の諸問題に関する文献の需要が増大したことを指摘し、「生活全般にわたり一層広汎な知識を得ようとする」特殊な読者が多く現われたことを喜び、1895 年以降の「喧噪なデカダンの空騒ぎ」が鎮まったことについて満足をこめて確認した。

しかし、文芸部門については悲観的評価が多く、A. M. スカビーチェスキイは《新しい言葉》(1897 年 1 月, №4) に発表した論文「病める文学の病める主人公たち」の中で、「ソログープとギッピウスのみならず、チャーホフ(『中二階のある家』、『私の生活』)とクプリーン(『モロフ』)においても、不本意ながら、優柔不断の精神病者」を見ると語ったし、スクリーバ[E. A. ソロヴィヨーフ=アンドレーヴィチ]も、《ノーヴォスチ》(1 月 2 日, 9 日)の「1896 年詩文学総評」の中で、「1896 年の文学は、事実として、注目に価する作品を何ひとつ与えなかった」、特にデカダン派の文学は「淫らな感情

と死の恐怖」という、ただ二つだけのモチーフの一千ものバリエーションを作り出しているにすぎないとし、現代文学の停滞を慨嘆した。

1897年

3月 短編『コノヴァーロフ』が《新しい言葉》(№6)3月号に掲載された。短編は、検閲官によって「極端に傾向的、かつ有害である」とされ、「社会主義的な、どぎつく煽動的性格」を有する「多くの個所」が大幅に削除・修正されなければならなかった。⁽²⁾ このため、雑誌のこの号は組み直しを余儀なくされ、発売日がいちじるしく遅れた。

《北方》28号(6月28日)の書評家、陪審読者〔A. A. コリンフスキイ〕は、文学界に最近現われたばかりであるが、すでに「その深く思索するリアリズム芸術の発達へと向かう広い道の上に」立つ作家、ゴーリキイの短編が、「この雑誌の指導者たちによって永久的に選出されたところの、リベラリズムの紋切り型へ奴隸的に従属する」文学の「死んだように無気力な背景のもとで」ひととき光彩を放っていると書いた。コノヴァーロフの形象については、これを人民のなかから出てきた「新しい余計者」としてとらえ、その魂は、インテリゲンツィヤにおけると同様、「化膿せる潰瘍」によって浸食されていると述べた。Ч. ヴェトリンスキイもこの短編の出現に注目し、《教化》7-8号に、「ますます自分の上に読者の注意を定着させる」作者の「疑いなく、充分に独創的な才能」が輝きだしたことを指摘した。

8月 短編『乱暴者（オーチェルク）』が《北方報知者》(№8)に掲載された。

B. A. ポッセは8月23日付け、ゴーリキイ宛書簡に書いた、——「あなたの『乱暴者』は私にはたいへん気に入りましたよ。あなたのごく小さい作品が、いずれも、その独創性によって注目されるのです……残念至極なのは、

(2) М. Горький. Собрание сочинений в 30-и томах. Гослитиздат, М., 1949-1955, т. 3, стр. 525. (以下、同著作集は C. c., と略記する。)

あなたがたえず自分の翼を、ただむやみに振り回しているばかりだということ
とです、しかもあなたの羽ばたきの一つひとつが、ポターペンコ、ボボルィ
キン、バランツェーヴィチの飛行全体よりもっと意味があるというのに。⁽³⁾

A.M. スカビーチェフスキイは、《祖国の子》(8月22日)の論文「人民の
中の強情な人びとのタイプ」の中で、『乱暴者』の主人公(植字工グヴォズ
ヂェフ)について——ロシア人はその大多数が温順で柔和であるが、生活に
適合し得ない「変わり種」、つまりは抗議するタイプをも生み出す。「コノヴ
ァーロフにおいては、強情さが発作的暴飲と浮浪生活とに彼を押し流すところ
の悩ましいトスカの型態としてのみ現われている。グヴォズヂェフのほう
は、この言葉の真に文字どおりの意味における強情な人間である……このよ
うな類のタイプをどこから拾い上げてくるのだろうか?」と書いた。《週間》
付録文庫(№9)の書評は、『乱暴者』は、この短編の中に「多分、たくさん
生れつつあるであろう」タイプが描かれているゆえに、「若干の興味」をそ
そるという見解を示した。Л. [П. Ф. ニコラーエフ] は、《ロシア思想》(№
9)に、ゴーリキイが「単に興味あるばかりでなく、最も興味ある」作家で
あって、「ロシア文芸のサロンの中に新しい社会層」——人間個性という唯
一の財産のほかにはなんにも持っていない、社会からはみ出した人々の階層
(『チェルカッシ』、『コノヴァーロフ』、『乱暴者』)を導き入れることが出来
たことを認めた。しかし、『乱暴者』の怒りは「無目的、無思想、非文化的
である」と結論づけた。

10月『オルロフ夫妻(デッサン)』が《ロシア思想》(№10)に掲載された。

《サンクト=ペテルブルク通報》(10月25日)に、Н. ラドシスキイ [В. К.
ペテールセン] は、「このデッサンはいろんな意味で大きなロマンに価する。
この作品は社会の中に多くの、熱烈な論議を捲き起こしている」ことを強調
したが、主人公グリゴーリイ・オルロフの中に庶民的タイプの厭世哲学者の

(3) Архив А. М. Горького.

姿を見、またコレラ患者のバラックが描かれている場面においては作者が「弱小な、苦しみ悩む兄弟への奉仕によって自らの罪を贖うことの必要を説くみじめな志向へ」後退していると断じた。A. スカビーチェフスキイは、コノヴァーロフやグヴォズデフとともにオルロフを「ロマンチック精神における自己分析的哲学」の産物と規定し（《祖国の子》11月7日）、B. プレオブラジェンスキイは、庶民の中に「理性の出口」を求めるところの、「高尚な精神的需要と志向」とが生きていることを想起せしめるもの、と評した。

《処女地》（12月1日）でB. チュイコは、ゴーリキイのデッサンを「その仮借なき真実」と「絶望的ペシミズム」の点でチャーホフの『百姓』（《ロシヤ思想》№4, 4月）と比較し、作家の中に「労働者の生活風俗」の描写を専門とする「現代ナロードニキ」の見地を証明しようとした。《週間》付録文庫（№11）は、グリゴリーの形象を「人民出身の失敗せるペチョーリン」と性格づけて、否定的評価をくだした。

ゴーリキイはこの頃、A. Л. ヴォルィンスキイ宛書簡に次のように書いた、——「私はもうすぐにも、私の浮浪人たち——わが《生活の教師たち》——を描くのを止めます。そして、やはり私がよく知っている別の階級の人びとを取り上げます。⁽⁴⁾」

11月『かつて人間であった人びと（オーチェルク）』（№№1～2, 10月～11月）が《新しい言葉》に掲載された。

《ノーヴォスチ》（12月4日）にスクリーバ〔E. A. ソロヴィヨーフ〕は——「プロテスト、これこそがゴーリキイ氏の描写する浮浪人の心理を理解するための鍵たりうる言葉である」、しかし、「プロテストのすべてがもしも浮浪人心理に起因するとするなら、はなはだ遺憾であろう」と述べた。《ロシヤ通報》（11月12日）ではИ-т〔イグナートフ〕が、木賃宿の各住人が重大な社会的道義的関心の担い手であることを意味づけた。しかし、評者の見

(4) Там же.

解では——「類似のタイプは、すでに数えきれぬほど多く、わが文学の中に姿を現わしている……《抗議の要素》としても、墜落の最低段階における《神意の火花》の保持を証明するものとしても。」

11 月 モスクワで、リベラル=デモクチシズム傾向の新聞《急使》（編集兼発行人、Я. А. フェイギン）が発刊され、11 月 21 日付け同紙には Вл. プレオブラジェンスキイによる最初の文学批評展望が掲載された。ここには「新しい作家」としてゴーリキイが取り上げられた。評者はゴーリキイの主人公たちを性格づけて、——これは「真理を渴望しているけれど、自らの中に彷徨する力への理性的出口を発見し得ない」反逆する自然力であるとし、彼らにとっては「単なる個人生活の充足によっては満足できない」のであって、「社会的本能と近い人びとへの奉仕という偉業への志向」が生来的に彼らに備わっていることを強調した。

12 月 『マーリヴァ（デッサン）』が《北方報知者》（№№ 11~12）に掲載された。

《ロシヤ通報》（11 月 11 日）では И-т [イグナートフ] が、短編の女主人公の形象が「女性の心の中に高まる偉業への、おぼろげな志向」を示すものであると指摘し、《ロシヤ思想》（1918, №1）は、マーリヴァの形象には「力づよい手による独創的デッサン」を認めるが、これは「目的を有すタイプではない」と評した。《週間》付録文庫（№12）は、この作品を「デカダン派人民主義」の系列に数え入れた。短編の自然描写に修辞の過剰を見る批評もいくつかあり、《処女地》（№23, 12 月 1 日）で В. チュイコは、ゴーリキイの才能を「新しい質」のものと認めたが、冒頭の海についての描写、とくに「海が笑っていた」という書き出しに注目し、この表現を「作りものめいた、わざとらしいリリシズム」と呼んだ。

12 月 10 日 宗務院長ポベドノスツェフを議長とする四大臣会議は、「狂信的社会主義者の巣窟」《新しい言葉》の閉鎖を決議した。決定にあたり、同誌の文芸部門に対して特別の注意が向けられた。「文芸部門においては、階

級闘争と労働者の貧困状態が暴露的に表現されているような作品に第一級の場所が提供されている。この主題は、ゴーリキイ（ペーシコフの筆名）の才能ある諸作品、『コノヴァーロフ』と『かつて人間であった人びと』においてとりわけ鮮明に制作されている。⁽⁵⁾ 同誌の閉鎖に関連して、ゴーリキイはヴォルィンスキイに書いた、——「私はその教義（合法マルクシズム——引用者）には縁もゆかりもないのですが、雑誌の中に存在するその教義への索引力が私には気に入っていました。」⁽⁶⁾

この年の文学現象に関する総括の中で、多くの雑誌がデカダン派の衰退とチェーホフの『百姓』（《ロシヤ思想》№4 およびスヴォーリン出版所より単行出版）の出現を歓迎するという見解を示した。これと並んで、若い作家ゴーリキイをチェーホフ、コロレンコとの比較において論ずる批評が現われはじめた。

《北方》（1898, №3, 1月18日）で、陪審読者〔A. A. コリンフスキイ〕は、「過ぐる年は……ただひとつのチェーホフの『百姓』ばかりでなく、その生活的活動力を示した……とくに大きな希望を与えるのは、M. ゴーリキイのペンネームによって署名するところの、ある若い文芸家である。ようやく最近、どうにか耳にする程度の、このペンネームはこの七、八ヵ月のあいだに完全な市民権を受け取った」と書き、《ロシヤ思想》（1898, №1）ではП. Ф. ニコラーエフが、まだ書き始めたばかりのゴーリキイの「力づよい、天才的資質」をコロレンコのような成熟した芸術家と比較することは尚早であろうが——と前置きをして、「両者によって表現された気分」を解明しようとする。「コロレンコ氏の気分は哲学的で、冷静で、柔軟で、もの悲しく、純粹にヒューマニスチックである……ゴーリキイ氏の気分は、反対に、純粹

(5) ЦГИАЛ (Центральный гос. исторический архив). В кн.; Летопись жизни и творчества А. М. Горького. Вып. 1, стр. 200.

(6) Архив А. М. Горького.

に男性的で、つねに落ち着きなく、つねに興奮、情熱によって、時には憎悪によって、満たされている……それは《原則》に反抗して暴動を起こす雑階級人のタイプを描いたところの、ポミャローフスキイの気分に近い。」ゴーリキイは「同じように《原則》に反抗する浮浪人・失業労働者の描き手である。」

1898 年

2月28日以降 ゴーリキイは、C.Π. ドロヴァトーフスキイに宛て書いた、——「序文を書き上げられないのが悲しい、しかし——出来ないのです。やってみているのですが、でもねえ、いつもまるで私が誰かに拳固を振り上げるとか、喧嘩を吹っかけるようになってしまうのです。そうでないと——まるで私が罪を犯して、涙ながらに懺悔しているように。そして、こういうことは一切、似つかわしくないと感じながら、私はこの仕事を投げ出してしまいました。⁽⁷⁾」

3月24～31日 ゴーリキイ作品集『記録と短編』第一巻刊行（サンクト＝ペテルブルク、C. ドロヴァトーフスキイと A. チャルーシニコフ出版所、1898、部数 3,000）。本巻は、ゴーリキイが自分の「二番目の教師」とよんだ、ニジェゴロートの弁護士 A. И. ラーニンに献ぜられた。収録作品——『チェルカッシ』、『鷹の歌』、『筏の上で』、『トスカ』、『ザズーブリナ』、『アルヒープ爺さんとリョーニカ』、『退屈まぎれに』、『乱暴者』、『マカール・チュードラ』、『オルロフ夫妻』。以上十篇。

4月16～23日 『記録と短編』第二巻刊行（同前、部数 3,500）。本巻は、サマーラ時代のゴーリキイの知人、M. C. ポゼルン夫人に献ぜられた。収録作品——『コノヴァーロフ』、『マーリヴァ』、『ゴルトヴァの定期市』、『マヒワについて』、『エメリヤン・ピリャーイ』、『イゼルギリ婆さん』、『曠野で』、

(7) C. c., т. 28, стр. 21.

『あやまち』。以上十篇。

ゴーリキイの最初の作品集刊行は読書界に巨大な反響を捲き起こした。4月20日、ゴーリキイはドロヴァトーフスキイに宛て書いた、——「私の作品に対する読者の態度は、どうやら私もちゃんとしたものを書けそうだという確信を私の中に強めるものです。」⁽⁸⁾しかし、その後、数多くの、たがいに矛盾し合い、多分に専断的な見解が入り混じる批評が現われ、作家を批評的騷擾の坩堝の中にひきずりこんだ。10月8～9日、ゴーリキイは Ф.Д. バーチュコフに宛て書いた、——「私が正しいのか、そうでないのか——しかし、現に存在する批評にはただ好奇心のみをもって対応しています、それは別の態度には価値しないと確信します。これは傲慢ではありません、早くいえば——悲しい事実なのです。」⁽⁹⁾

最初の批評的反響は、作品集第二巻刊行の一週間後に現われた。《祖国の子》（5月1日、8日）に А. スカビーチェフスキイは書いた。「ゴーリキイ氏の短編それぞれが、それ自体、ドラマチックな題材と均整のとれた、調和のある、発達したものを内包して、一つの完結した世界を形づくる。」しかも、芸術性と傾向性とは妨害し合うことなく、たがいに補強し合っている。ただ一つ欠点を挙げるなら、それは主人公の「理想化」である。批評家は、ゴーリキイの主人公たちがしばしば表明する農民についての侮蔑的見解のゆえに、作家を「ネオ・マルクシズム」の宣伝者とする一連の批評に反対し、もし彼がマルクシストであったとすれば、「われわれは彼から農村の百姓たちのかわりに、工場労働者の若干の理想化を期待し得たであろう。しかし、諸短編の中にわれわれが類似のものに出会うことはない！ ゴーリキイ氏は工場の生活風俗にはぜんぜん触れていない」と述べた。『マーリヴァ』と『チェルカッシ』に対しては、批評家は「都会と工場が人民に及ぼす墮落的影響」という観点から吟味していた。《処女地》（5月21日）では象徴派詩人

(8) С. с., т. 28, стр. 23.

(9) Там же, стр. 32.

H. ミーンスキイが執筆し、ゴーリキイの作品の中に「強者の権利の伝道」を見、その主人公たちの中には「善と悪についての古い観念の枠の中では窮窟であるところの」、「ある新しい地方的ニッチェ主義、アゾフ海沿岸的デモニズムの伝道者である超人浮浪者、超人放浪者」を見ようと試みた。ゴーリキイの大胆さと自立性とを高く評価し賞讃しながら、ミーンスキイは、本質的には、「地上生活の超越」、「彼岸へ、神の世界への復帰」というデカダンの象徴主義を唱道する自分の陣営の中にゴーリキイを引き入れようとするものであった。(ゴーリキイの「ロマンチカ」を正統リアリズムの「異端」と見る傾向は、ミーンスキイにかぎらず、この時代には多くの批評家の中に存在していた。)《神の世界》(№7)における A. B. [ボグダーノヴィチ] の論文は、ゴーリキイに対する ヨリ深い理解を示していた。「ゴーリキイ氏の作品の中には潑刺たる気分、独立独歩の誇らかなるものが感じられる。このことによって、これらの作品は貧困と排斥による同じ世界を取り上げた他の作者たちの記録小説から決然ときわ立っている」。さらにボグダーノヴィチは、ゴーリキイが浮浪人を理想化しているという一般に流布されていたし、ながく改められなかった見解に反駁を加え、ゴーリキイにとっては「かつて人間であった人びと」は社会の屑であるけれど、しかし彼らの「不安な魂」を「彼は公然と関心を向けて描き出したのだ」という理解を押し出している。《ロシヤ通報》(8月22日)では、И-т [イグナートフ] が、ゴーリキイの主人公たちの中には「善への、真実のモラルへの、大いなる正義への、悪の絶滅についての配慮への志向がある」と強調し、ゴーリキイの浮浪人のタイプを分類した——懷疑論者、正義のためにたたかうエネルギッシュな闘士、不幸な真理探求者の三つのタイプである。《ロシヤ思想》(№7)の書評もゴーリキイの主人公たちについて触れ、「こんなふうに生きてはならない——彼ら自身ばかりではなく、彼らに似たところのある人びとの階級全体にとっても」、「人びとの生活慣習の中にあるきわめて本質的な、基本的なものを変える必要がある、しかし何を変えなければならぬか、彼らは自分の理知によっ

ては会得できない」と述べた。

《ロシアの富》は、まず第七号の書評でゴーリキイの作品集を取り上げた、——「初めから終わりまでロマンチストとしてとどまりつつ」、「まったく同一の理念——完全かつ絶対の自由への自然発生的志向」を描きながら、ゴーリキイは、浮浪人ではない「定住民」や、生活変革の積極的プログラムにはあまり注意をはらわない。寓話『マヒワについて』はそうしたプログラムの不安定さについて語るものである、というのである。つづいて第九号と第十号には、雑誌の編集主幹 H. K. ミハイロフスキイの二つの論文が掲載された。第一論文「マクシム・ゴーリキイ氏とその主人公たちについて」の中で、ミハイロフスキイは、「彼の短編集二巻本は、それ自体として、完全にまとまったものである。その上に、これは芸術的享樂をも、思索のための滋養をも提供することが可能なものである」という一般的評価を与え、(i) 作者の思想傾向については、「産業の進歩を、そうあるべきものとして、歓迎するようなオプチミストたちの数には含められない」として、ゴーリキイをストルーヴェのような合法マルクシストたちから区別し、作家の課題が「農村と都市との粗雑な対置から遠く離れたところにあり」、ゴーリキイの主人公たちにとって「百姓と農村生活への深い侮蔑」が生来的であるにせよ（『チェルカッシ』、『マーリヴァ』など）、作者と主人公たちがそのような侮蔑をもって対するのは、資本主義化された農村であり、資本主義文明の多くの側面に対してである、と述べた。(ii) 主人公の形象については、ゴーリキイの描く浮浪人はつねに「詩人・哲学者」であり、この階級の特徴ではないところの、「作者自身の非常にすばらしい言葉」で語っている非典型的形象である。ゴーリキイが浮浪現象の社会的原因（資本主義化と現代農村の分解）を明示せず、自分の主人公たちを「極端な個人主義者」として描いているということで、ミハイロフスキイは作者を批判した。第二論文「ふたたびマクシム・ゴーリキイ氏とその主人公たちについて」においてミハイロフスキイは、ロシア文学がゴーリキイの登場によって獲得したところの「大

きな芸術的力」について高い評価を与え、それとともに、ゴーリキイをニーチェ流の「力の讃美者」と見る見解を打ち出し、これが当時におけるゴーリキイ観に基準的判例を与えるものになった。彼の見解によれば、——ゴーリキイの「哲学する浮浪人」が有する若干の理念はニーチェ的モラルから発するものであり、それゆえに「ゴーリキイの創造におけるデカダン主義」という結論が生ずる。ゴーリキイの主人公たちはすべて「理想化されて、泥濘の中から洗い浄められた浮浪人の肖像の画廊」として把握され、ロマンチック寓話も同じ意味での理想化にほかならず、『イゼルギリ婆さん』におけるダンコとラルラは対立する性格ではなく、「生への貧欲」、「何ものによっても制限されることなき自由への志向」、「宿命的孤独と非社会性」という共通の特徴をもつものとして同一の範疇に含められた。

ゴーリキイは、ミハイロフスキイの二つの論文の出現が注目すべき事件であることを理解していた。八十ないし九十年代におけるロシヤ・インテリゲンツィヤの「思想界の帝王」としての彼の権威は、九十年代後半においてはマルクシストとの論争によって揺らぎ始めていたけれども、文学界においては依然、一つの、大きな規準となっていたのである。11月末、ゴーリキイはコロレンコに宛て書いた、——「ニコライ・コンスタンチノヴィチが私について書いたと知ったとき、心臓がドキンとしました。《これは仕返しだ》⁽¹⁰⁾と考えました。彼は私の中に注意に価する、満足にさえ価するものを認めているらしい……私は、彼がもっと厳しい態度で私を扱うものと思っていました……H. K. に何か非常にいい言葉を述べたいものです。でも、出来ません。ありがとう、と言うべきでしょうか？ でも、何のためにそれを彼に？ 私に⁽¹¹⁾したところで、そんなものは不要ですからね。」

(10) かつてゴーリキイは《サマーラ新聞》(1895年4月18日)に、ミハイロフスキイのネクラソフ論をとりあげ、この論文にかなり強い調子で否定的見解を表明した。このことに関連してゴーリキイとコロレンコのあいだに書簡の往復があった。前掲拙稿、33～39ページ参照。

(11) C. c., т. 28, стр. 48.

保守派の新聞《モスクワ通報》（10月10日）もゴーリキイの才能を否定することはできなかった。しかし、彼の創作の扱い方はきわめて独特であった。A. バサールギン〔A. И. ヴヴェヂェンスキイ〕はゴーリキイを「憂愁と退屈の歌い手」、『鷹の歌』を「ブイリーナ時代の魅惑的な模倣」とよび、彼の作品をスラヴ主義の精神において解釈しようとした。ゴーリキイの主人公たちのトスカは、経済的、社会的、一般的理念と共通するものはない、つまり、「工場の騒音によって」その精神生活を圧殺された「西欧人」が塗りこめられた粗雑な物質万能的世界と共通するものはないのであって、「生活脱出という ロシヤ人の 禁欲主義的志向によって呼び起こされた」というのである。

ゴーリキイを比較的に良く理解していた B. ポッセは《教化》（№11）に「抗議する憂鬱の歌い手」を発表し、ゴーリキイの主人公たちのトスカは「行動的な、抗議する憂鬱であり、無力から生じたのではなく、自らのうちに理性的出口を発見できないために力の余剰から生ずる憂鬱である」という理解を示し、ゴーリキイを「第一級の才能を有する芸術家——プロレタリアートの代表者」とよんだ。しかしポッセは、浮浪人とプロレタリアートとのあいだの本質的なちがいは眼を向けず、まったく同一のものとして扱っていたし、また、あたかもゴーリキイにとっては「道徳と力」がほとんど同義語であるという彼の断言は、作家をニーチェ主義の使徒とするミハイローフスキイの見解にそう遠くへだたててはいなかった。

A. ヴォルィンスキイは、1899年4月に出た《北方報知者》（№10～12）でゴーリキイの作品集を取り上げ、そこに「イプセン的、ニーチェ的思想の反射」を見た。彼は作者の才能を全般的に高く評価したが、とくに主人公たちの形象については、「飢えて、貧困な、しかし完全な独立性によって誇り高く、一種の世界的、全人類的詩情にみたされた人間のタイプ——かかるタイプはこれまでの文学には存在しなかった」という注目すべき発言をした。

M. プロトポーポフは、《ロシヤ思想》（1899, №№5～6）に「破滅する

力」を發表した。人民主義の理念に立つこの批評家は、ゴーリキイの中には「一定の理想」が欠如し、その思想は宿命論的で、寂靜主義の底で低迷していると論じた。彼はさらに、浮浪人の形象を分析して、そこにはワーシカ・ブスラーエフから流れ出る反乱者・破壊者の系譜が見当たるが、大地の建設者・創造者である イリヤ・ムーロメツ につづく形象が不在である、と嘆いた。ゴーリキイが描く「かつて人間であった人びと」は、批評家によれば、破壊にしか役立ち得ないところの、「軌条からはずれた機関車」であった。これに対して反駁を加えたのは、《急使》(1899年7月26日)の リャール [A.C. スクリャール] の論文である、——「プロトポーポフ氏はゴーリキイ氏が宿命論者だと きめつける。われわれが思うには、ゴーリキイ氏は反対に、積極的力、エネルギー、主体的活動の崇拜者だ。プロトポーポフ氏は、寂靜主義の哲学を伝道していると断じているが、われわれが思うには、彼は反対に、積極的創造、行動的愛の哲学を伝道しているのだ……ゴーリキイ氏の哲学がまさしく寂靜主義の伝道と対立するのだということを信じるためには、せめて『鷹の歌』でも思い出だけで充分である。われわれの見るところでは、ゴーリキイ氏の天性は高度に情熱的で、胸をおどらせつつ真理を探索し、嘘と生活の俗悪に対して永遠的に抗議するところのものである。」

5月 中編『ヴァーレニカ・オレーソヴァ』が《北方報知者》(№№ 3~5)に掲載された。小説の最初の部分が發表されると、出版事業監督局は「特定階級身分全体に対する侮辱的嘲弄が結論づけられるような」作品の發表を許さぬ⁽¹²⁾という検閲規則を侵害するものとしてこれに強い関心を示した。その結果、内務省は4月18日付けで、《北方報知者》編集者に対し「有害な傾向のために」最初の警告を發した。このことに関連してゴーリキイは A. ヴォルィンスキイに書き送った、——「警告おめでとう。第四号のことであなたは叱られますね……しかし、神よ！——『ヴァーレニカ』がなんと不用意に印

(12) K. Муратова. Новые цензурные материалы о М. Горьком. «Звезда», 1941, № 6, стр. 178.

刷されたことか、あなたのもとにはなんという仕末におえぬコレクションができたことか。」同じく小説の主題にふれては——「私はこの中で、文化と理知の人間を単純な心と感情の人間に、無力を力に対置したかったのです。」⁽¹³⁾

中編の評価においては否定的見解が多かった。《週間》付録文庫（№5）の書評「ロシヤの出版より。独創的デカダンス」は、作者がその口を通じてものがたる女主人公の性格は作為的であり、結末の場面は「好色文学的」であるときめつけた。《カフカース》（5月12日、6月23日、B.Л.〔ヴェリーチュ〕）、《急使》（6月8日、Вл. プレオブラジェンスキイ）、《新時代》（8月21日、B. ブレーニン）の各紙もほぼ同じ見解を表明した。こうした見解をいっそう発展させたのは《ロシヤ思想》（№7）の П. Ф. ニコラーエフの論文である。彼は中編のもつ「毒素」について書いた。彼によれば、ゴーリキイは「文化そのものを信じないで、そのかわり、自然の威力、真実、美を、自然の力をファンタスティックな熱意をこめて信じている。」とはいえ彼はゴーリキイの才能を認め、それが「男性的で、事業への呼びかけを渴望する、燃えたぎる積極的」才能であるとよんだ。

肯定的反響を代表するのは、《祖国の子》（8月14日）の A. スカビーチェフスキイである。「すべての非常に才能ゆたかなものと同様、ゴーリキイ氏の小説は、その生命力によって、新鮮さによって、さらにそう言いたければ、革新性によって……文学慣習からの大胆な逸脱によって、諸君を驚倒させる」、「このことの中には、輝かしい進歩的よそおいの下にまったくの道義的墮落がしばしば秘められており、反対に、みすばらしい未発達性と暗い迷妄とが自己のうちに、更新せる人間性の高価な真珠を内蔵しているという、人生の皮肉と戯れが提示されているのだ。」

5月7日未明 ゴーリキイはニージニイ・ノーヴゴロトで逮捕され、憲兵によりチフリスに護送され、5月28日までメテフ城砦監獄に拘禁された。ゴ

(13) Архив А. М. Горького.

ーリキイの逮捕の理由は、彼のチフリス時代（1891～1892）の友人、アフナーシェフと他のチフリス社会民主主義組織構成員の事件に関係ありとする容疑であった。

〔未完〕